

# シュヤーマ本生説話の変容

——仏典を中心とする——

## 橋本草子

元末に郭居敬によって作られた『全相二十四孝詩選』は、明代以降、児童教育用の図書として様々の形で出版され、中国人の道德意識の根底を形成する上で大きな役割を果たしてきた。『全相二十四孝詩選』所収の二十四人の孝子は一人を除いて他はすべて中国の歴史上に実在した、もしくは実在したと信じられている人物であるが、その例外の一人とは睽子である。

明代以降の二十四孝においては、たとえば尊経閣文庫所蔵の『重刻初穎日記故事』中の「全像二十四孝」などのようにこの睽子を周代の人物としているものもあり、明末には睽子は既に一般には中国の古代の人物と思われていたようである。しかし睽子はその名前からもうかがえるように、元来は仏典にみえる人物で、さらにその源流をたどるならば紀元前1世紀頃までさかのぼることのできるジャータカ（本生談）の一つ、シュヤーマ本生談である。このことはすでに先人によって指摘されていることであり<sup>1)</sup>、最近では、坪井直子さんによって睽子説話の基礎資料の収集および、資料の相互比較による伝来過程の探求が精力的に行われている<sup>2)</sup>。

郭居敬の『全相二十四孝詩選』の成立以後、「二十四孝」は儒家の蒙学書となり、孝子の顔ぶれも大きく入れ替わっているにもかかわらず、その後も一貫して仏典に由来する睽子の話が残り続けた理由を考えると「二十四孝」の成立と伝承に仏教が深く関わっていた事情がからんでいるように思われる。その意味で睽子説話は二十四孝成立の謎を解く鍵を握る重要な説話である。

本論ではこれまでに発表された論に教えられたことに基づきつつ、中国で二

十四孝に取り入れられる以前の、仏典における睽子の物語に焦点をしぼり、どのような変化が見られるかをたどってみたい。仏教についての基本的知識を持たない筆者がこのような作業に取り組むことの無謀であることは承知しているが、中国に於ける睽子説話の改変の特色を明らかにするためにも欠くことの出来ない作業であるので、浅学を顧みず敢えて試みることにした。読者のご教示、ご批判をお願いしたい。

中国の文献で睽子、剡子、琰子、閃子などの様々の文字で表されているこの人名は元来はサンスクリットでは Śyāma, パーリ語で Sāma と表記するが以後はシュヤマ本生またはサーマ本生と称することにする。

ところで、仏教成立以前のインドに於ける類似説話の存在を示すものとしては「ラーマヤナ」第二編の63, 64に見えるダシャラタ王の過去の罪についての話があげられるという<sup>3)</sup>。「ラーマヤナ」は古代インドに起源を持つラーマ物語をもとにしてヴァールミーキによって集大成された叙事詩であり、岩本裕氏によれば『サーマ・ジャータカ』の所伝は、徳行のあるすべての人物をジャータカ化するというジャータカ説話の性格から考えて、当時ヒンドウ社会に行われていた説話を採り上げたことは明かであり、しかもそれがラーマ物語からであったらうことは『ダサラタ＝ジャータカ』との関連から明かと言わねばならぬ。とすれば、西暦紀元前二世紀ごろにラーマ物語があったことは疑いえないと思われる。<sup>4)</sup>とされている。現在伝わる「ラーマヤナ」の該当部分が、「サーマ・ジャータカ」のもとになったラーマ物語そのままであるかどうかには、なお慎重な吟味が必要ではあろうが、ともかく、現在までのところ、睽子説話の最古の姿をうかがう手がかりとしては、まず、この「ラーマヤナ」第二編63, 64の説話からみてゆく必要があるだろう。そこで次に「ラーマヤナ」第二編63, 64のあらすじを要約してみる<sup>5)</sup>。

Ⅱ—63 ダシャラタ王がまだ皇太子であったとき、サラユー河に狩猟に出かけて暗闇のなかで瓶に水を満たす音と象が踏み荒らすような音を聞き、そちらの方向へ矢を放つ。その矢は一人の苦行者に当たり、苦行者は倒れな

がら、自分が森の中で暮らす聖仙であり、年老いて病弱な盲目の父母の世話をしていることを王に告げ、自分の体の急所に刺さった矢を抜いて、急いで父のもとへ息子の死を知らせに行くようにと頼む。その際に苦行者は自分がバラモン階層ではないこと、母はシュードラ（奴隷階層）、父はヴァイシャ（庶民階層）であることを告げて王に安心するようという。王はためらいながらも苦行者の急所に刺さった矢を抜くと苦行者は息を引き取る。

Ⅱ-64 王は苦行者に言われたとおりに老夫婦の所へ行き、すべてを告げ、二人を苦行者の遺体のもとへ案内する。両親が苦行者の亡骸を水で清めると苦行者は天神となってインドラ神とともに天に昇ってゆく。両親も王に向かって将来、王も息子に対する悲しみのために命を落とすであろう事を預言して、火葬の薪のうえに身を横たえて天国に赴く。以上のような思い出を妃に語るとダシャラタ王は、息子ラーマのことを思いながら息を引き取った。

「ラーマヤナ」では後のサーマジャータカのように苦行者が生き返るという現世的な意味でのハッピーエンドにならず、悲劇的な結末のままで話は終わっている。

後の中国での受容との関連で注目されるのは、苦行者が自分の姿を描写して「わたしの様に頭髪を束ね樹皮や獣皮を着ている者」と述べていること、「たった一本の矢が年老いた父と母と、そして私を殺してしまったのだ。」という表現の見えることである。この表現は漢訳仏典では「一矢殺三道士」（「六度集経」）などの表現で引き継がれていく。

次に現在までに明らかになったところでの仏教関係のシュヤーマ本生談を記録する文献を、北伝系統のものに限って、ほぼ時代順に並べれば次のようになる<sup>6)</sup>。

①Mahavastu II<sup>7)</sup>

②「六度集経」 卷五<sup>8)</sup>

- ③「僧伽羅刹所集經」 卷上<sup>9)</sup>
- ④「仏説菩薩睽子經」「仏説睽子經」<sup>10)</sup>
- ⑤「雜寶藏經」 二 王子以肉濟父母緣<sup>11)</sup>
- ⑥「經律異相」 卷十 一切妙見為盲父母子遇王獵所射<sup>12)</sup>
- ⑦「法苑珠林」 卷四十九 忠孝篇<sup>13)</sup>
- ⑧「方廣大莊嚴經」 卷五<sup>14)</sup>
- ⑨「父母恩重經」 異本<sup>15)</sup>
- ⑩『義楚六帖』十四 人事親朋部二十八 孝子六<sup>16)</sup>
- ⑪「釈迦仏因地為睽子行孝」(大足石刻宝頂山大仏灣摩崖)<sup>17)</sup>
- ⑫「仁孝皇后勸善書」<sup>18)</sup>

①の「マハーヴァスツ」は紀元前1世紀から紀元2世紀の終わりくらいまでに成立したと見られる仏伝文学でかなり大乘的思想教理に影響されているものだという<sup>19)</sup>が、残念ながら邦訳がなく、英訳<sup>20)</sup>も参照することが出来なかった。

今、平岡聡氏が「Mahāvastu-avadāna の内容」<sup>21)</sup>で紹介されているものによれば、次のようなものである。

シュヤーマカ・ジャータカ (śyamakajātakam) [ II 209. 3—231. 6]

息子の死を告げられてもシュッドーダナ王はそれを信じなかったことに関するジャータカ。あるバラモン(シュッドーダナ)は妻(マヤー)と共に隠棲し、シュヤーマカ(仏陀)という子を設ける。親孝行な彼は老齡の両親によく仕えていたが、ある時、森で狩りをしていたペーリヤクシャ王は誤ってシュヤーマカを矢で射てしまう。彼は年老いた両親の世話を王に託すと死んでしまう。王は両親に自分の非を詫びたが、そのバラモンは真実語で死んだはずのシュヤーマカを蘇らせた。連結に続き (śyāmakajātakasya parikalpam), 韻文で散文の内容が反復される。

この紹介で見ると、主人公の蘇生について、神の介入は全く見られないし、漢訳仏典のいくつかのように両親の目が開いたとの記述も、全く見られないようである。

「マハーヴァスツ」とほぼ同じ頃の作とされるのがサーンチー大塔(第一

塔)の西門にみえる浮き彫りである。西門の年代は紀元前1世紀の中頃から紀元1世紀始めのころといわれている。この図について干瀉氏は「左下：国王が水を汲みに来たサーマ仙人を誤って射たところ。その右：仙人は帝釈天に救われ水瓶を肩にしている，国王は帝釈天の後に従う。上右：仙人の両親の庵。その左手：帝釈天，国王及びその従者等が仙人を伴い，お詫びに来ている。」<sup>22)</sup>とされている。この解釈に従うならばこの浮彫では帝釈天の出現によって主人公は蘇生している。

「マハーヴァースツ」について古い文献としては②の「六度集経」があげられる。これは呉の康僧会が251年～280年の間に漢訳したもので原典は伝わらないが、2世紀中頃くらいの成立かといわれる<sup>23)</sup>。次に全文を引く。

昔者菩薩。厥名曰睽。常懷普慈。潤逮衆生。悲愍群愚不覩三尊。將其二親。処于山沢。父母年耆。兩目失明。睽為悲楚。言之泣涕。夜常三興。消息寒温。至孝之行。徳香熏乾。地祇海龍。国人並知。奉仏十善。不殺衆生。道不捨遺。守貞不娶。身禍都息。兩舌惡罵。妄言綺語。譖謗邪偽。口過都絶。中心衆穢。嫉恚貪餐。心垢都寂。信善有福。為惡有殃。以草茅為廬。蓬蒿為席。清浄無欲。志若天金。山有流泉。中生蓮華。衆果甘美周旋其辺。夙興採果。未嘗先甘。其仁遠照。禽獸附恃。二親時渴。睽行吸水。迦夷国王入山田獵。彎弓發矢。射山麋鹿。誤中睽胸。矢毒流行。其痛難言。左右顧眄涕泣大言。誰以一矢殺三道士者乎。吾親年耆。又俱失明。一朝無我。普當殞命。抗声哀曰。象以其牙。犀以其角。翠以其毛。吾無牙角光目之毛。將以何死乎。王聞哀声。下馬問曰。爾為深山乎。答曰。吾將二親処斯山中。除世衆穢。学進道志。王聞睽言。哽噎流淚。甚痛悼之。曰。吾為不仁。殘夭物命。又殺至孝。拳哀云奈此何。群臣巨細莫不哽咽。王重曰。吾以一國救子之命。願示親所在。吾欲首過曰。便向小徑。去斯不遠有小蓬廬。吾親在中。為吾啓親。自斯長別。幸卒余年。慎無追恋也。勢復拳哀。奄忽而絶。王逮士衆。重復哀慟。尋所示路到厥親所。王從衆多草木蕭蕭有声。二親聞之疑其異人。曰行者何人。王曰。吾是迦夷国王。親曰。王翔茲甚善。

斯有草席可以息涼，甘果可食，吾子吸水，今者且還。王覩其親以慈待子，重為哽噎。王謂親曰，吾覩兩道士以慈待子，吾心切悼甚痛無量。道士子睽者吾射殺之。親驚怛曰，吾子何罪而殺之乎，子操仁惻蹈地常恐地痛。其有何罪而王殺之。王曰至孝之子，實為上賢，吾射麋鹿悞中之耳。曰子已死，將何恃哉，吾今死矣，惟願大王牽吾二老，著子屍處。必見窮沒。庶同灰土，王聞親辭，又重哀慟，自牽其親，將至屍所。父以首著膝上，母抱其足。鳴口吮足，各以一手捫其箭瘡。椎胸搏頰仰首呼曰，天神地神，樹神水神，吾子睽者，奉仏信法，尊賢孝親。懷無外之弘仁。潤逮草木。又曰若子審奉仏，至孝之誠上聞天者，箭當拔出。重毒消滅，子獲生存，卒其至孝之行。子行不然，吾言不誠，遂當終沒俱為灰土。天帝釈，四天大王，地祇，海龍，聞親哀聲。信如其言。靡不擾動。帝釈身下。謂其親曰。斯至孝之子。吾能活之。以天神藥灌睽口中。忽然得蘇。父母及睽，主逮臣從，悲樂交集。普復拳哀。王曰奉仏至孝之德，乃至於斯。遂命群臣，自今之後率土人民，皆奉仏十德之善，修睽至孝之行。一國則焉。然後國豐民康，遂致太平，仏告諸比丘。吾世世奉諸仏至孝之行，德高福盛，遂成天中之天三界獨步。時睽者吾身是。國王者阿難是。睽父者今吾父是。母者吾母舎妙是。天帝釈者弥勒是也。菩薩法忍度無極行忍辱如是。

「六度集經」ではシュヤーマは睽と訳され、王の矢に当たり死んだ睽は天帝釈が口の中に注いだ薬によってよみがえっているが、まだ後世のように盲目の両親が視力を回復するところまではいっていない。また漢訳仏典では一般に両親の出身階層にはふれていない。

次に古い文献は③の「僧伽羅刹所集經」である。

これはカニシカ王の師であるサンガラクシャの撰ということだが、その後三世紀ころの後人が現在の形にしたといわれる<sup>24)</sup>。中国へは僧伽跋澄が建元二十年（西紀384年）に将来し、竺仏念が訳した。

その中の睽についての部分は次のようなものだが後半は文に錯簡、脱落があるらしく意味が通じない。

於彼拘薩羅国。有一止住处隱学士名曰睽施。行十善功德備具持瓶行取水。是時拘薩羅国王出行遊獵。追逐麋鹿於山中射著。喚呼便憂父母。猶如飛鳥無有兩翅。父母年老目盲無所見。今被毒箭俱亦当死。父母修四等心。便説此偈

惟我父母老／目冥無所覩／父母生子時／欲得蒙其力／  
 自覺而覺人／一切同自相／如彼色声聞／智者自息意／  
 最勝愍萌類／皆至彼道場／起者尽滅度／是世最妙義

ここでは国王が拘薩羅国王とされていることが注目される。拘薩羅国とは「ラーマヤナ」の物語の舞台となった北インドのコーサラ国を指すであろうから、或いは先の「六度集経」よりも古い形を残しているのかもしれない。主人公は睽施と訳されている。

次の「睽子経」については謝明勲氏に詳細な考証がある<sup>25)</sup>。謝氏は、梁の僧祐の「出三蔵記集」をはじめとする歴代の経録を精査され、睽子経には多くの異名を持つ経典があるがそれらのうちには同本異訳のものが含まれており、通説のごとく西秦の法堅（聖堅）の訳した一種のみが存したわけではない事を指摘された。さらに隋の費長房の「歴代三宝記」の引く《始興録》という書によれば、そのはじめには羅什（鳩摩羅什）訳のものが存在していたらしく、唐の智昇の「開元釈教録」巻四に載せる鳩摩羅什所訳経七十四部、三百八十四卷のなかに「《睽本起経》一卷（亦直云《睽経》，出《六度経》，異訳，第三出，見《李郭録》）」という記載があり、また同じ「開元録」の同巻の乞伏秦沙門釈聖堅所訳の十五部二十四卷のなかにも、「睽子経一卷（一名《孝子睽経》，一名《菩薩睽経》，一名《仏説睽経》，一名《睽本経》，一名《孝子隠経》，凡六名第四出，出《六度集》第二卷，異訳，見《始興録》及《法上録》）」の記載があることを指摘しておられる。謝氏はこれらの「《六度経》《六度集》より出る」という記述に注目して《睽子経》は《六度集経》から後人が節訳したものであるとされた。現在「大正蔵経」には失訳本菩薩睽子経と高麗本，宋本，明本の三種の「仏説睽子経」を収録するが、それらは細かい表現の相違はあっても、あ

らすじは共通しており、主人公の名を睽とし、国名を迦夷国と訳すなど「六度集経」と重なる部分が多い。謝氏の指摘は首肯できる。また初期の「睽子経」の訳者として鳩摩羅什をあげることができるとすればおそくとも東晋の末までに「睽子経」は成立していたことになる。ただ「睽子経」は「六度集経」の中の睽道士本生のみを取り出したという意味では節訳といえるが、「六度集経」の睽道士本生は総字数約680字なのに対して「睽子経」は総字数2440字あまりにのぼり、「六度集経」の故事を中国人向けにふくらましたものと見るべきであろう。

つぎに「六度集経」の故事と比較するために、宋本の「仏説睽子経」によって見てみることにする。

仏が一切妙行という菩薩であった時の話だとする短い前置きが最初にあつて、話は次のように始まっている。

時 有 迦 夷 国。中 有 一 長 老 孤 無 兒 子。夫 婦 兩 目 皆 盲。心 願 入 山 求 無 上 慧。修 清 淨 志 信 樂 空 閑。菩 薩 念 言。此 人 發 意 欲 学 妙 道。而 兩 目 皆 盲 目 無 所 覩。若 入 山 中 或 墮 溝 坑。或 逢 毒 虫 所 見 危 害。若 我 寿 終 為 其 作 子。供 養 父 母 終 其 寿。即 便 往 生 盲 父 母 家 為 其 作 子。父 母 歡 喜 愛 之 甚 重。布 發 道 意 欲 行 入 山。以 生 子 故 便 樂 世 間。子 年 十 歲 号 曰 睽 子。至 孝 仁 慈 奉 行 十 善。（中 略）

睽 年 過 十 歲。睽 自 長 跪 白 父 母 言。本 發 大 意 欲 入 深 山 志 求 空 寂 無 上 之 道。豈 以 子 故 而 絕 本 願。人 居 世 間 無 常 百 變。命 非 金 石 对 至 無 期。願 如 本 意 宜 本 先 志。自 隨 父 母 俱 共 入 山 侍 養 之 宜 不 失 時 節。父 母 報 睽 子 言。孝 順 天 自 知 之。不 違 本 誓 便 当 入 山。（後 略）

ここで注目されるのは、もともと入山の志を持っていた両親が子供が生まれたために現世を楽しむようになったが、十歳になった睽が両親を説得して入山させたという話が挿入されていることである。これは「六度集経」にも後述の「雑宝蔵経」にも見えないエピソードである。このエピソードを挿入した訳者の意図はおそらく、仏教に於ける孝が、単に両親への現世的な口腹の養いを意味するのではなく、両親を現世を離れた修行の道へといざなうことにこそあることを強調したかったのであろう。



さて、入山した両親に、睽は行き届いた孝養を尽くし、山中の動物たちは皆、心和らいで互いに損なうことが無い。やがて国王が現れて睽が射られる場面は次のようである。

父母時渴欲飲。睽著鹿皮衣提瓶行取水。麋鹿飛鳥亦復往飲不相畏難。時迦夷国王入山射獵。王見水辺有麋鹿飛鳥。引弓射之箭誤中睽。睽被毒箭甚痛。便大呼言。誰持一毒箭射殺三道人。（後略）

ここで睽が父母のために水を汲みに行くのに鹿の衣を着けて瓶を提げて行くという記述が現れることに注目したい。先に触れたように「ラーマヤーナ」には「私のように頭髪を束ね樹皮や獣皮を身につける者」という記述があって、サーンチーの浮彫でもそれらしき姿で彫られている。ところが中国での睽子の画像には鹿の皮を身にまとった姿で描かれる事が多い。現在までに、私が文献によって見ることでできた西域から中国にかけての Śyāma 本生の壁画や石刻のうちシュヤーマが明らかに鹿の皮を身につけた姿で描かれているのは、敦煌莫高窟第299窟壁画と第302窟壁画である。299窟は北周、302窟は隋のものと思われるから、いずれもこの經典の訳出以後の壁画である。そのような伝承はこの經典から始まった可能性が強いであろう。

この後には王と睽との対話が続き、王は睽にかわって父母の世話をすることを誓う。王が睽の両親をさがしに立ち去った後、睽は死ぬ。王によって睽のもとへ案内された両親は遺体を抱きかかえて嘆き悲しむところから睽が蘇生するまでの場面は次のようである。

王即牽盲父母往到尸上，父抱其頭，母抱兩脚著与膝上，各以兩手捫摸睽箭，仰天呼言，諸天龍神山神樹神，我子睽者天下至孝，是諸天龍神所知，我年已老目無所見，身代子死睽活不恨，於是父母俱共誓言，若睽至孝天地所知，箭当拔出，毒痛当除睽応更生

於是第二忉利天帝座即為動。以眼見此二盲道人抱子号呼。乃聞第四兜率天上。釈梵四王從天上来。如人屈伸之頃。来住睽前。以神妙藥灌睽口中。藥入睽口箭拔毒出。更生如故。父母聞睽以死已生。兩目皆開。飛鳥走獸皆大歡樂之音，風息雲消日為重光。（後略）

この部分を先の「六度集経」の該当部分と比較してみると目に付く相違は両親の目が開いたという記述が加わったことである。これは或いは原典では睽が生き返って両目を開いたという記述であったのかもしれないが、この後の中国の伝承では両親の目がみえるようになったと受け止められていくのである。念のために「大正蔵経」所収の他の三テキストをみてみると、すべてに「父母眼開」という表現が見える。なお、後述のように南伝のサーマジャータカでも両親の目が開くというひとこまが付加されている。

「雑宝蔵経」は北魏の吉迦夜と曇曜の訳で西紀472年に訳されている。その原本のできたのは西北インド地方で、時はカニシカ王よりやや後であろうとされている<sup>26)</sup>。

昔迦尸国王土界之中。有一大山。中有仙人名睽摩迦。父母年老。而眼俱盲。常取好菓鮮花美水。以養父母。安置閑静無怖畏处。凡有所作。举动行止。先白父母。白父母已。便取水去。時梵摩達王。遊獵而行見鹿飲水。挽弓射之。藥箭誤中睽摩迦身。被毒箭已。高声唱言。一箭殺三人斯痛何酷。其王聞其声。尋以弓箭投之於地。便即往看。誰作此言。我聞此山中有仙人。名睽摩迦。慈仁孝順。養盲父母。举世称嘆。汝今非睽摩迦也。答言。我即是也。而白王言。今我此身。不計苦痛。但憂父母年老目冥。從今飢困。無人供養耳。王復問言。汝盲父母。今在何許。睽摩迦指示王言。在彼草屋中。王即至盲父母所。睽摩迦父。時語婦言。我眼瞶動。將非我孝子睽摩迦有衰患不。婦復語夫。我乳亦惕惕而動。將非我子有不祥事不。時盲父母。聞王行声索索。心生恐怖。非我子行。為是誰也。王到其前。唱言作礼。盲父母言。我眼無所見。為是誰礼。答言。我是迦尸国王。時盲父母。命王言坐。我子若在。当以好華菓奉上於王。我子朝往取水。遲晚久待不来。王便悲泣。而説偈言

／我為斯国王 遊獵於此山／但欲射禽獸 不覺中害人／我今捨王位 來事盲父母／与汝子無異 慎莫生憂苦／

盲父母。以偈答王曰

／我子慈孝順 天上人中無／王雖見憐愍 何得如我子／王当見憐愍 願将示子処／得在兒左右 并命意分足／

於是。王将盲父母。往至睽摩迦迦。既至兒所。搥胸懊惱。号咷而言。我子慈仁。孝順無比。天神地神。山神樹神。河神池神諸神。説偈而言。

／釈梵天世王 云何不佐助／我之孝順子 使見如此苦／深感我孝子 而速救濟命／

時釈提桓因。宮殿震動。以天耳聞盲父母悲惻語声。即從天下。往到其所。而語睽摩迦言。汝於王所。生惡心也。答言。実無惡心。釈提桓因言。誰当信汝無惡心也。睽摩迦答言。我於王所有惡心者。毒遍身中即爾命終。若我於王無惡心者。毒箭当出身瘡便愈。即如其言。毒箭自出。平復如故。王大歡喜。踊躍無量。便出教令。普告国内。当修慈仁孝事父母。睽摩迦從昔已來。慈仁孝順。供養父母。欲知爾時盲父者今淨飯王是。爾時盲母者。摩耶夫人是。睽摩迦者。今我身是。迦尸国王。舍利弗是。時釈提桓因。摩訶迦葉是。

アンダーライン部分は、①にもこれまでの漢訳仏典にも見られなかった記述である。これは二十四孝子の中の曾参の話に見られるような遠く離れていても親子は互いの心身の痛みや危険を感じあうものだという中国の古来の民間信仰が取り入れられたものだろう<sup>27)</sup>。

「雜寶藏經」では主人公の名前は睽摩迦と訳され、国王は迦尸国王梵摩達とされること、父母の目が開いたという記述のないことなど、「六度集經」「睽子經」とは異なっている。また偈が挿入されていることも前二者との相違点である。

次の「経律異相」と「法苑珠林」は、諸々の経典から共通する項目ごとに類話を集めた仏教類書とでも称すべきもので、直接に外来仏典を訳したものではないので、あとで採り上げることにして、⑧の「方广大莊嚴經」を見てみる。これは683年、唐の地婆訶羅訳で、原典は *Lalitavistara*。旧訳に西晋の竺法護が308年に訳した「普曜經」があるが<sup>28)</sup>、それにはシュヤーマの事は見えない

ようである。「方廣大莊嚴經」巻五の頌で仏陀の前世を列挙する中に、次のような一節が見える。

昔作奢摩仙子時／父母居山同苦行／王以毒箭誤而中／抱慈無恨歎喜死

ここではシュヤマは奢摩仙子と訳されている。おそらく唐代にはこの話は広く知られていて、さまざまな文字が当てられていても人々には睽子の話だと分かっていたのであろう。

⑥の「経律異相」は梁の武帝の命によって天監十五年（519年）、宝唱によって編纂されたものであるが、ほとんど、「睽子経」を踏襲しているので引用を略す。

後の二十四孝との関連で注目すべきなのは⑦の「法苑珠林」忠孝篇である。唐の総章元年（668年）に道世によって編纂されたこの大仏教類書は劫量篇から伝記篇に至る百巻からなり、忠孝篇は巻四十九にあたる。述意部、引証部、太子部、睽子部、業因部の五部からなるが、最初の述意部ではこの篇の趣旨が述べられ、続いて引証部では孝に関連する經典の一節が引かれる。太子部では報恩経を引いて須闍提太子の話のをべる。このスジャータ太子本生（Sujata）は純大乘の本生で南伝にはみえないとのことである<sup>20</sup>。

つぎに続くのが睽子部で、「睽子経」からの引用を基本としつつ、国王が両親にあっていきさつを述べる部分の偈の部分だけ「雑宝蔵経」から引用して述べている。

最後の業因部では「雑宝蔵経」から慈童女の話の引いた後に感応縁として十五の中国の孝子の説話を述べている。その十五の説話とは、舜子、郭巨、丁蘭、董永、陳遺、姜詩、吳達、蕭固、咸沖、王虚之、伯俞、石奢、孝婦、雄和、王千石の十五人の孝子の話であるが、このうち舜子、郭巨、丁蘭、董永、姜詩、伯瑜の六人が後世の二十四孝図に含まれる孝子であることは注目すべきであろう。

仏典のなかに中国の説話が織り込まれるようになる文献は、この「法苑珠

林」がはじめてであるが、ここでは未だインド伝来の話と中国の話の区別は見失われていない。しかし同じ頃に、その区別が消失しつつあったことを示す文献として「父母恩重経」の異本にあたる、いわゆる丁蘭本が存在することを坪井直子さんが指摘している<sup>30)</sup>。

「父母恩重経」は偽経で幾種類かの異本がある。そのうち『開元釈教録』十八に「父母恩重経一卷、経引丁蘭董黯郭巨等、故知人造三紙」と記述されているものは「父母恩重経」の原形とみるべきものであると指摘し、「丁蘭本」と名付けたのは禿氏祐祥氏であった<sup>31)</sup>。「丁蘭本」は『開元録』の指摘以後、禿氏氏のいわゆる「古本」に取って代わられたらしく現存するテキストが無かった。しかし幸いなことに敦煌文書からは多くの父母恩重経が発見されており、新井慧誉氏は三十七種の写本の丁寧な校異作業を進めた結果、それらのほとんどが「丁蘭本」と「古本」とで占められていること、「丁蘭本」と「古本」との相違点は丁蘭董黯郭巨閃子に言及する問題の部分を含むか否かだけであることを明らかにされた<sup>32)</sup>。新井氏によれば「父母恩重経」は『武周録』（『大周刊定衆経目録』695年）の卷十五に偽経として初出するというから、丁蘭本はそのころから行われていたであろう。新井氏は底本として S149 の写本を使いその他に S2269, S6274, S6087, 北京本（号14闕40）台湾本（08698）李盛鐸本（152）をも参照して異同を注としてつけておられるが、今、新井氏の校異を参考にして全文を意味の通るように句点をつけてみると次のようになる。

昔丁蘭木母川靈感応孝顺(1), 董黯(2)生義之報徳, 郭巨至孝天賜黄金。  
迦夷国王入山遊獵(3), 挽(4)弓射鹿, 悟傷閃匈, 二父母仰天悲啼(5), 由閃之孝(6), 諸天下藥塗創, 閃子還活, 父母眼開, 明覩日月。不慈不孝, 天不感應, 閃子更生, 父母開目, 人之孝顺, 百行為本, 外書内経, 明文成記。

(1)丁蘭の話には「川靈」の語はふさわしくなく、何らかの別字と思われるが、そのままにしておく。

(2)台湾本に従う。董黯の話は敦煌写本 P2621 や、日本にのみ伝存する二種の「孝子伝」（船橋家本、陽明文庫本）にみえる話で、関連する画像はボストン美術館蔵北魏石室、ミネアポリス美術館蔵北魏石棺、カ

ンサス市ネルソン美術館蔵北齊石床にもみられ、六朝から唐代にかけて行われていた説話であるが後世の文献画像には出現しなくなる。P2621では董癩，二種の「孝子伝」では董黯，ボストン美術館蔵石室では董晏と記す<sup>33)</sup>。

(3)北京本（闕40）に従う。

(4) S2269, S6087, 北京本（闕40），台湾本，李盛鐸本に従う。

(5)北京本（闕40）に従う。

(6)北京本（闕40）に従う。

丁蘭，董癩，郭巨という三人の中国産の孝子とならんで，閃子の話が引かれているわけである。むろんインド伝来の話であることは迦夷国という国名から意識されていたではあろうが，シュヤーマの話が中国の孝子説話と同等の扱いを受け始めていることを示す興味深い資料である。ここでも最後に両親の目がみえるようになったことを明記している。主人公の名前が閃子となっているのは，敦煌文書P3536, P3680と共通している。また，これまでの仏典（①，②，④，⑤，⑥，⑦）では，最後に過去世と現在とを結合して説明する部分がついていたのであるが，「父母恩重経」以後の中国の文献では，消失してしまうのも大きな変化である。

敦煌文書P3536, P3680は，もう一種のS389とともに同一系統の文献である可能性が高いといわれ<sup>34)</sup>，ともに散文と七言四句の韻文とから成っている。三つの文書を合わせると睽子のほかに明達，郭巨，舜子，文讓，向生，王褒，丁蘭，王武子の八人の孝子の名前がみえ，「孝行録」所収の孝子と重なるものの多い興味深い文献である。いま潘重規氏が両者を校訂したテキストによると次のようなものである<sup>35)</sup>。

閃（閃）字者，嘉夷国人也，父母年老，並皆寔（喪）亡。閃子晨夕侍養無闕，常著鹿皮之衣，与鹿為伴，擔瓶取水，在鹿群中，時遇国王出城遊獵，乃見間下有鹿郡（群）行遂（逐），王張弓射之。悟（悞）中閃子，失声號叫云；「一箭煞三人。」王聞之有人叫聲，下馬而問。閃子答言：「父母年老，

又俱喪明，侍養無人，必應餓死，」語了身亡。詩曰：

閃子行尊孝老親，不恨君王射此身，  
父母年老失兩目，誰之一箭煞三人。

ここでは閃子は死んだままで話が終わっている。同じように七言四句の韻文を伴っている S 389, P 3536, P 3680 所載の明達，郭巨，舜子，文讓，向生，王褒，王武子，丁蘭の話がいずれも韻文で終わっている所から見ると，後半が欠けているわけではなく，これで話は完結しているのであろう。主人公の蘇生で終わっていない珍しい例で，先に紹介した「ラーマヤナ」の説話との関連が疑われる。

⑩の『義楚六帖』は五代の後晋開運二年から後周顯徳元年（945～955年）に積義楚によって編まれた仏教類書であるが，その十四，人事親朋部二十八孝子六に閃摩行孝と題して次のような話が載っている。句点は筆者が施した。

〔閃摩行孝〕閃摩經云，閃子父母俱盲，在山修道，每採薪果，供養父母。  
身被鹿皮，遇王出獵。悞為是鹿，発箭射之，因是命終。王至仁慈，來告父母，至其尸所，呼大而哭，閃摩重活，至孝感也。

ここで「閃摩經」とされているのはおそらく④の「睽子經」または⑤の「雜寶藏經」を指すのであろうが，気になるのはシュヤーマの原音を残す「閃摩」という訳語はこれまでに見えなかったことである。あるいは「睽子經」「雜寶藏經」とは別の原典があるのであろうか。

次にあげるのは，文献ではなく石刻であるが，南宋の淳熙から淳佑年間（1179～1249年）趙智鳳によって造営された大足県宝頂山大仏湾第17号摩崖に掘られた銘文である。この摩崖には釈迦仏の巨大な半身像のまわりに，12組の釈迦の孝行報恩事跡の彫像が彫られており，それぞれの像の下に内容を説明する経文が刻されている。

その一つが「釈迦仏因地為睽子行孝」と題する彫像と経文である。残念ながら彫像についてははっきりした写真が見られないが近年発行された『大足石刻

銘文録』（1999年8月重慶出版社）によれば、「睽子が石台のうえに仰向けに横たわり、石台の左に国王が立ち、右側に盲父母が立って睽子の頭や胸を撫で、図の上方には帝釈像が立っている」ものという。つぎに同書に紹介されている銘文を記す。句点は筆者が施した。

#### 釈迦仏因地為睽子行孝

大蔵仏説睽子経云、仏告阿難昔有菩薩、名曰慈恵、孝養父母師長。時迦夷國中有一長者孤无兒子、兩目皆盲、心願入山、求无上恵。菩薩念言、此人入山学道、若我寿終、当為作子。菩薩命終、即便往生盲父母家。字曰睽子。睽年十歳、随父母入山、採果汲水。時国王出獵、箭誤中睽胸、被毒命終。王心怖懼、詣盲父母所具言上事。父母令王牽我二人至于子所、捫摸睽箭、仰天呼言、睽子至孝、天地所知、箭当拔出、作是言已、感帝釈与薬更生如故、父母聞已兩目皆開、王大歡喜、睽語王言、欲具福者、安慰人民、当令奉戒。仏告阿難、彼睽子者、我身是也。

この経文は最初に「大蔵仏説睽子経云」としているとおおり、「睽子経」によっている。菩薩の名を慈恵とする点は現存の高麗本のテキストに似ている。

南宋といえはすでに二十四孝が成立し、中国各地の墓室壁画に睽子は中国の孝子たちと並んでさかんに描かれていた時代であるが、仏教徒の間では「睽子経」は依然として独立して伝えられていたことがわかる。

最後にあげるのは明の永楽二年（1404年）に勅撰書として刊行された『仁孝皇后勸善書』卷三<sup>36)</sup>に記されるものである。これは「睽子経」からの引用であるという記述はないものの、内容はほとんど「睽子経」そのままであるので引用は略す。仁孝皇后とは成祖永楽帝の皇后徐氏で、この『勸善書』のほかに『内訓』などの書を編み、仏教の信仰篤い皇后として知られている。

このように宋代以降の中国の仏教徒の間ではもっぱら「睽子経」によってこの話は伝えられていたようである。ところで興味深いことには、仁孝皇后の夫である永楽帝朱棣の著になる『孝順事實』第一卷には同じシュヤマ説話が次のように全く中国化された形で載せられているのである<sup>37)</sup>。



剡子鹿乳

剡子性至孝母病思鹿乳。遍求不能得。乃衣鹿皮。入鹿群中以求之。卒遇獵者。彎弓欲發。亟告之故。乃得免且遺以鹿乳而去。

睽の文字が剡に変わっているだけでなく、ストーリーにも重大な改変が加えられている。孝行の対象が両親でなく母とされ、母の病のために鹿乳を求めるために鹿皮を着て鹿群の中に入っていたところ、危うく獵師に射られそうになったがすぐに知らせたので難を免れ、鹿乳を贈られたという、まことに奇妙な話になりさがっている。これは二十四孝に取り入れられ儒教的孝の観念によって中国化されたシュヤーマ説話の究極の姿ともいうべきものである。二十四孝に取り入れられて以後の説話の変化については坪井直子氏の論文に譲りたいが、坪井氏が触れなかったシュヤーマ説話とのもう一つの重要な相違を付け加えておきたい。それは主人公が射られて死ぬという設定から、声を挙げたことによって難を免れるという設定に変化していることである。このような変化は元の郭居敬の「全相二十四孝詩選」から始まるものであるが、主人公の不慮の死および善行の報いによる蘇生という原説話の眼目ともいえる部分を失ったこの話は、全く間の抜けた話になってしまったといわざるを得ない。

このほかにこの説話は南伝仏教の経典にもみられる。いま調べ得た範囲での文献をあげると次のようなものがある。

①Jātaka (Fausbölls Edition XXII 540)<sup>38)</sup>

②Cariyāpiṭaka 33<sup>39)</sup>

③「善見律毘婆沙」卷六<sup>40)</sup>

④The Milindapañhā p.198~199<sup>41)</sup>

⑤Avadana-Kalpalatā 101<sup>42)</sup>

①は元来は偈のみから成っていたパーリの経典がセイロンへ伝えられてからセイロン語 (Sinhalese) の散文に訳して伝えられたが五世紀の中頃に再びパーリ語に還訳されたもの<sup>43)</sup>という。いま、「睽摩賢者本生物語」(「南伝大蔵経」卷38 高田修訳)によって「序分」「主分」「結分」の三部分から成る此

の経典のうち、サーマの物語にあたる主分の内容を要約して示すと次のようなものである。

昔、波羅奈の近くの河の兩岸に二つの獵師の村があり、両村の獵師の頭は互いに息子と娘が生まれたら結婚させようと約束していた。やがて二人に息子ドクラーと娘バーリカーが生まれ、成長した二人を親たちは結婚させようとする。梵天の世界から再生してきた清浄な二人は結婚を欲しなかったが親たちの強いすすめでお互いに淫事を欲しない旨の手紙を送りあって結婚した。結婚後も二人は別に住み、獵師の子でありながら魚も獣も殺さずに暮らした。やがて親の許しを得て二人は出家しヒマラヤの山地に入って暮らし始めた。帝釈はこの事を知って二人のために山中に庵と出家のための必要品を用意させる。二人はそれぞれの庵に暮らし、二人の慈悲の力によって獣も鳥もすべて仲良く暮らすようになった。帝釈は二人がやがて盲目になる危険がある事を察知して、世話をしてくれる子供をつくることを勧めるが二人は承知しない。そこで帝釈はバーリカーが月経の時にその臍を撫でるようにとドクラーに教え、そのとおりにすると菩薩がバーリカーの胎内に宿った。月満ちて黄金色の子供が生まれスワンナサーマ（金色の談摩）と名付けられた。

サーマが十六歳になった時、両親は毒蛇の毒気を浴びて盲目になってしまふ。それ以来サーマは森の中で両親に行き届いた世話を尽くして養う。

ある日のこと波羅奈国の王であるビリヤッカが狩りにやってきて、鹿の群にとりまかれて水を汲みにきたサーマの姿を見かけ、何者かを確認しようと矢を射かける。矢はサーマの右横腹にあたりサーマは倒れる。

倒れたサーマと国王の間でいくつかの傷がやりとりされて、国王は自分の行いを悔い、サーマにかわって盲目の両親を養おうと決意し、サーマに両親の所在を尋ねる。サーマは国王に両親の世話を託すと、痛みのため失神してしまふ。

その時、パフソーダリーという、今から七生以前に摩訶薩（サーマ）の母であった女神が、息子の運命に気付いて、息子とその両親、国王を救う

ために空中を飛んできて国王に次のような偈を語りかける。「大王、爾は罪を犯しぬ。なすべからざるを爾はなせり。無辜の父母とその子とを三人を一箭に害へり。」「いざ吾爾に教ふべし、善趣の爾にあり得むがごと二人の盲ひを如法に森に扶養へよ、思ふに汝に善趣はあらむ。」

王はサーマが死んでしまったものと思い手厚く供養すると供養した水瓶を持って両親の住む庵を訪ねて行く。両親はサーマの死を嘆き悲しむが国王を非難しようとはせず、王は王位を捨てて両親を養うことを誓う。国王は両親を案内してサーマの所へ連れていく。両親はサーマの体を膝に乗せて、それぞれに七つの偈を唱えて誓言し、最後に女神が誓言するとサーマはよみがえり、両親は目が見えるようになった。

②は5世紀頃の成立か<sup>44)</sup>といわれる。これは偈の一部だけを引いたものであるので、引用は略す。

③は斉の永明六年(488年)に僧伽跋陀羅によって訳されたもので現存の巴利律蔵に最も近い律蔵の註釈である<sup>45)</sup>という。この經典では女人が懐胎する原因として七種の行為をあげているがその四番目に手摩臍下をあげ、其の例としてサーマを引くのである。

摩臍下者、如睽菩薩父母欲盲。天帝釈逆知。下来至其所而言。宜合陰陽当生兒。夫婦既悉出家為道。答言。我等已出家。法不得如此。帝釈復言。若不合陰陽。可以手摩臍下。即随言便懐胎而生睽。是名手摩臍下。

④は紀元前2世紀頃西北インドを支配していたギリシア人の王メナンドロス(ミリンダ)と仏僧ナーガセーナの問答を記したもので原型は紀元前後に成立したが後に増広をかさねたと考えられる<sup>46)</sup>。漢訳「那先比丘経」があるが、サーマの話はその部分には無い。邦訳本の第二編第四章第六「慈愛心の力」にサーマの話が引かれている。それによると慈愛心の修習に努めていたサーマが(禪定の境地に達した者に期待されるはずの十一の利益を受けることなく)ピリヤッカ王に毒矢で射られて気を失って倒れたのは何故かというミリンダ王の問いにたいしてナーガセーナが十一の利益は慈愛心を先天的に有する人に属す

るのではなく、慈愛心の修習に属するのである。サーマが水瓶を持ち上げた瞬間、彼は慈愛心の修習力を失ったのだと説明する部分である。

⑤は11世紀カシミールのクシュールメンドラの撰という<sup>47)</sup>が邦訳が無く、参照できなかつた。

以上見てきたように南伝の仏典ではサーマの誕生以前の両親の話にかなり重点が置かれ、サーマの蘇生についても女神が登場するなどかなりの相違が見られる。ただサーマが蘇生した後、両親の目が開くなど中国の伝承と共通部分も見られる。③のように南伝の小乗仏典も中国に僅かながら入ってきているが、睽子説話には小乗仏典の影響は見られないようである。

## 註

- 1) 禿氏祐祥「全相二十四孝詩選解説」(『二十四孝詩選』全国書房, 昭和21年)。
- 2) (1)坪井直子「睽子探源—二十四孝成立史のために—」(『愛知県立大学大学院国際文化研究科論集』第1号, 2000年3月)。  
(2)坪井直子「睽子序説」(『愛知県立大学大学院国際文化研究科論集』第2号, 2001年3月)。  
(3)坪井直子「二十四孝成立論—睽子をめぐって—」(『京都語文』7号, 2001年5月)。
- 3) 註2)の(1)論文, p. 28。
- 4) 岩本裕訳『ラーマヤナ』1 解題, p. 261, (平凡社東洋文庫376, 1980.4)。
- 5) 岩本裕訳『ラーマヤナ』2 p. 228~239 (平凡社, 東洋文庫, 441, 1985.1)
- 6) 千瀉龍祥『本生経類の思想史的研究』附篇『本生経類総合全表』(山喜房仏書林, 昭和53年6月)を参考にし, 筆者の調査をつけ加えた。
- 7) Mahāvastu-avadāna 出版, E. Senart, 3vols, Paris, 1882-97, p. 209~231。  
英訳 J. J. Jones, 3vols, London, 1949~56。
- 8) 『大正蔵経』第三卷, p. 24~25。
- 9) 『大正蔵経』第四卷, p. 116~117。
- 10) 『大正蔵経』第三卷, p. 436~443。
- 11) 『大正蔵経』第四卷, p. 448~449。
- 12) 『大正蔵経』第五十三卷, p. 51~52。
- 13) 『大正蔵経』第五十三卷, p. 656~658。
- 14) 『大正蔵経』第三卷, p. 566。
- 15) 新井慧誉「敦煌本『父母恩重経』校異」(『二松学舎大学論集』昭和53年度)。

- 16) 『義楚六帖附索引』 (朋友書店, 1991年再刊)。
- 17) 『大足石刻銘文録』 (重慶出版社, 1999. 8)。
- 18) 『大明仁孝皇后勸善書』 (蓬左文庫所蔵)。
- 19) 千瀧龍祥『ジャータカ概観』 (春秋社, 昭和56年7月), p. 37~38。
- 20) 註7) 参照。
- 21) 平岡聡「Mahāvastu-avadāna の内容」 (『仏教大学仏教学会紀要』第8号, 平成12年3月)。
- 22) 註19) 書, p. 137, 図版解説。
- 23) 註19) 書, p. 46。
- 24) 註19) 書, p. 39。
- 25) 謝明勲「敦煌本《孝子伝》「睽子」故事考察」 (『敦煌学』第十七輯1991年9月)。
- 26) 註19) 書, p. 49。
- 27) 王充「論衡」感虚第十九にはこのような迷信に対する批判がみえる。
- 28) 註19) 書 p. 52。
- 29) 註19) 書 p. 109。
- 30) 註2) の(1)書 p. 20~21。
- 31) 禿氏祐祥「父母恩重経の異本について」 (『宗教研究』5巻4号, 昭和3年7月)。
- 32) 新井慧誉「敦煌本『父母恩重経』校異」 (『二松学舎大学論集』昭和53年度)。
- 33) 黒田 彰「孝子伝の図—後漢, 北魏を中心とする—」 (『説話文学研究』第34号, 1999. 5)。
- 34) 王三慶「《敦煌变文集》中的〈孝子伝〉新探」 (『敦煌学』第14輯1989年4月)。
- 35) 潘重規『敦煌变文集新書』下, p. 1266 (中国文化大学中文研究所 1984年1月)。
- 36) 『大明仁孝皇后勸善書』永楽五年 内府刊本 (蓬左文庫所蔵)
- 37) 『孝順事实』 (北京図書館古籍珍本叢刊 14所収)。
- 38) Jātakatṭhakathā 出版 V. Fausböll “Jātakatṭhavaṇṇanā” 6vols and an Index, London, 1877~97.  
英訳 E. B. Cowell and Others, 6vols, and an Index, Cambridge 1895-1907, 1913.  
独訳 J. Dutoit, 7vols, Leipzig, 1908~21.  
和訳 長井真琴ほか訳『南伝大蔵経』第28~39巻, 中村元監修補注『ジャータカ全集』 (春秋社, 1991年)。
- 39) Cariyāpiṭaka 出版 Pali Text Society, London, 1882.  
英訳 B. C. Law 1938.  
和訳 松濤誠廉『南伝大蔵経』第41巻。所行蔵経。
- 40) 『大正蔵経』卷二十四, p. 713。

- 41) *Milndapañhā* 出版 *The Milindapañho*, V. Trenckner, London 1928.  
漢訳 那先比丘経『大正蔵経』卷三十二。  
和訳『ミリンダ王の問い』1～3（中村元, 早島鏡正訳, 平凡社, 東洋文庫1963.  
11～1964.10）。
- 42) (Bodhisattva-) *Avadānakalpalatā*.
- 43) 註19) 書 p. 42～43。
- 44) 干瀉龍祥『本生経類の思想史的研究』p.105。
- 45) 『仏書解説辞典』縮刷版（大東出版社 平成11年）「善見律毘婆沙」の項。
- 46) 註41) 所引『ミリンダ王の問い』1, 解説（中村元）。
- 47) 註44) 書 p. 120。